The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近世・近代における助数詞「回」について ： 行為や出来事を数える用法を中心に
Author(s)	伊藤, 由貴
Citation	語文. 2011, 97, p. 54-66
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69185
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

近世・近代における助数詞「回」について

――行為や出来事を数える用法を中心に――

伊藤由貴

一　はじめに

現代において行為や出来事を数える場合には助数詞である「度」や「回」を用いることができる。

（1）今年の夏は〈三回／三度〉かき氷を食べた。

IIDA（一九九九）では現代語における「度」と「回」について、その違いを考察しているが、用法は基本的に重なる部分が多いとしている。このように似た用法を持つ二つの助数詞であるが、現代の話しことばでは「回」を用いることが多くなり、「度」はあまり使用されなくなってきている。（これについては五・二節で述べる。）しかし、時代を遡って見てみると、近世までは行為や出来事を数える場合、「度（タビ・ド）」が多く使用されており、「回」の用例は少ない。そこで本稿では「回」がどのような過程を経て「度」と並び使用されるようになったのかを考察していく。そして、中世以前は一般的な行為や出来事を数える助数詞ではなかった助数詞の「回」が、近世の漢文訓読体の文献で生産的に使用されるようになり、近代に入って一般的に使用されるようになったということを述べる。

本稿の構成は以下のとおりである。二節で中国語について確認し、三節で中世以前の状況について述べる。四節では近世の状況について文学作品と、それ以外の文献として科学書を取り上げる。五節では近代の状況を考察する。六節はまとめである。

用例は漢字表記を基準として集めた。表記は「回」「廻」の二通りがあるが、特に用法の違いは見出せなかったため、同じ助数詞として取り扱う。なお、本稿では「三回」の「三」のような数を示す部分を本数詞と呼び、「回」のような本数詞につける接尾語を助数詞と呼ぶ。そして、本数詞と助数詞を併せたものを数詞と呼ぶ。また、「数」「幾」も本数詞に準じるものとして扱っている。

二　中国語における量詞「回」

漢語助数詞である「回」は、中国語を源流としている。『漢語大詞典』では「回」の項目の中に中国語の類別詞である量詞としての意味が記述されており、「次」と書かれている。「次」は中国語で行為や出来事を数える場合に用いる量詞である。[1]

(2)　回〔…〕⑳量詞。(1)次。唐慕幽《柳》詩：〝今古憑君一贈行、幾回折盡復重生。〞宋王安石《送張公儀宰安豐》詩：〝雁飛南北三兩回、回首湖山空夢亂。〞魯迅《兩地書．致許廣平四》：〝這回要先講‘兄’字的講義了。〞(漢語大詞典)

このように中国語においても「回」は行為や出来事を数える用法があることがわかる。では、次の章から中国語の「回」が日本語の中にどのように受容されていったのかを見ていきたい。

三　中世以前の「回」

まずは中世以前の「回」の状況を確認しておく。中世以前の日本語では、行為や出来事を数える助数詞として主に「度（タビ・ド）」が使用されていた。タビは上代から万葉仮名の用例が確認でき、ドも中古から仮名書きの用例が確認できる。

(3)　白波の　寄そる浜辺に　別れなば　いともすべなみ　八度袖振る【夜多妣蘇弖布流】　(萬葉集・巻二十・四三七九)

(4)　まろは七とまうてし侍そ三とはまうてぬいまよたひはことにもあらす　(三巻本枕草子・第一五三段)

一方、中国語を源流とする助数詞「回」は漢文の中で古くから使用されている。上代では『日本書紀』や『万葉集』の題詞にその用例がみられる。

(5)　會明、兄豐城命以二夢辭一奏二于天皇一曰、自登二御諸山一向レ東、而八廻弄槍、八廻擊刀。　(日本書紀・崇神紀)

(6)　忽見二入レ京述レ懷之作。生別悲兮斷レ腸萬廻、怨緒難レ禁。聊奉二所心一一首　(萬葉集・四〇〇七［題詞］)

中古では次のように漢詩でも用例が見られる。

(7)　衙頭未有須臾息　呵手千廻著案文　(菅家文草・雪中早衙)

和文の中では、異同のある箇所ではあるものの、『うつほ物語』で一例用例がみられる。

(8)　この宮、「数回（はくゐ）仕うまつりそしたりや」とて、御かはらけ参りたまふ。[2]　(うつほ物語・国譲下)

この時期において和文での「回」の用例は珍しい。『うつほ物語』の漢語を調査した佐藤（一九八二）では他の仮名文にみられない独自の漢語について「漢文資料の用語を土台にしている」（二六四頁）と結論づけている。「数回」は佐藤氏の調査において漢文関係の用例が見いだせなかった語としてまとめられているが、前述したとおり「回」は漢文で用例が見られるため、佐藤氏の結論と合致する。以上のことから、中古まで「回」は基本的に漢文のなかで使用されていたと見ることが出来る。

中世に入ると漢文訓読体や和漢混淆体の文章の中で使用が見られるようになるが、その用例数は「度」と比べると僅かである。

(9) 萬劫千生幾回カ生ジ、幾回カ死セン。（正法眼蔵随聞記一）

(10) 黒髪ノ亂ン世マデ存ヘバ是ヲ今ハノ形見トモ見ヨ此女房立歸リ、形見ノ髪ト歌トヲ見テ、讀テハ泣、々テハ讀ミ、千度百廻卷返セ共、心亂テセン方モナシ。（太平記・巻四）

(10)の例では、タビと振仮名が附されているが、行為や出来事を数える「回」に振仮名が附される場合、タビと附されることが多い。『類聚名義抄』においても「幾廻」は「イクタビ」と書かれており、(5)に挙げた『日本書紀』の例でも北野本で「ヤタビ」という訓が確認できる。

クワイと振仮名が附されている「回」も存在するが、その場合は次に挙げる例の「星霜」「霜華」のように年月を数える用例である。

(11) その後、帝皇廿五代、星霜三百余廻なり。

（保元物語・将軍塚鳴動並びに彗星出づる事）

(12) あひしたがふ霜華すみやかに九廻をへたり。

（正法眼蔵・辨道話）

『易林本節用集』では、「一回」という項があるが、そこには割注で「一年」と書かれている。したがって、音読みされる「回」という助数詞は専ら年月を数える場合に使用されていたものと思われる。現代でも使う「三回忌」などという言い方はこの用法を引きついだものであろう。

これらの状況を踏まえると、中世以前において、行為や出来事を数える「回」は、未だ日本語の中には定着していないことがわかる。[3]

四　近世の「回」

四・一　章段を数える用法

近世に入ると助数詞「回」は新たに章段を数える場合にも使用されるようになる。現代でもこの章段を数える「回」はよく使用されている。この用法は中国の白話小説の中の一形式、章回小説の単位「回」を取り入れたものとみられる。振仮名が附される場合、「だん」などと附されることもあったものの、「くわい」と附されることが多い。章段を数える「回」は当初、通俗物や読本のような白話小説の影響を色濃く受けた作品に見られたが、次第に人情本といったその他のジャンルの作品でも章段を数える場合に「回」が使用されるようになっていく。では、行為や出来事を数える「回」はどのような状態だったのだろうか。

四・二　行為や出来事を数える用法

四・二・一　文学作品

近世に入ると、行為や出来事を数える一般的な助数詞としては「度」に加えて、「遍（返）」が使用されるようになる。「遍」は中世では経や念仏を唱えるなど声を出して何かを読み上げる場合に使用されていたが、近世に入って行為や出来事全般に使用されるようになってくる。

(13) 〔…〕此中間我こやどの新橋へはつれゆかずして、同じ所

を四五返も右行左行とつれてまはりけれども〔…〕

（好色一代女・巻四）

行為や出来事を数える助数詞としての「回」は、中世以前は日本語として定着していないということを述べたが、近世の唐話の辞書では「一回」が立項されていることから、「回」は未だ外国語として注釈を加える対象であったと推測される。

【表1】唐話辞書記述一覧

年代	辞書名	項目	語釈
一七二七	俗語解	一回	一度ト云　一次ト云モヲナジ
一七四八	小説字彙	一回兒	ヒトタビ
一七八四	語録訳義	一回	ヒトタビナリ
一八一〇	水滸伝訳解	一回	何ニテモ云云ヒトイキ也

唐話辞書で注釈される対象であった「回」は文学作品では通俗物や読本といった白話小説の影響が強いジャンルの作品に見られるようになる。

次に挙げる白話小説の「売油郎独占花魁」では、「回」が使用されているが、その翻訳である『通俗繡像新裁綺史』では「一回」にヒトタビと振仮名が附され、白話小説の語彙がそのまま利用されている。

(14) a　圖個飽看那女娘一回、也是前生福分。（売油郎独占花魁）

b　身ヲ圖マジ飽ニアノ女娘ヲ見コト一回ナリトコレ我前生ノ福分ナラン。

（通俗繡像新裁綺史・第四回）

岡田（二〇〇六）では通俗物の語彙について調査し「翻訳作品の多くが数量詞において白話語彙に大きく支配されていることがわかる。」（三八四頁）としているが、「回」も白話語彙が利用される形で通俗物に多くみられるようになったと考えられる。

また、通俗物では原文が「回」でない部分でも「回」が用いられることもある。（15 a）の中国語の原文では「遍」となっている箇所が、翻訳された（15 b）では「回」となっている。

(15) a　有心看上了朱小官人、幾遍的到下鈎子去勾搭他、誰知朱重是個老實人、又且蘭花齷齪醜陋、朱重也看不上眼

（売油郎独占花魁）

b　那小官人ヲ看上シ。幾回鈎子ヲ投下シ。勾搭セントシケレトモ。朱重原来老實ノ者ニテ又蘭花ガ貌齷齪ナレバ。終ニ他ヲ眼ニトヽメズ。（通俗赤縄奇縁・第三回）

通俗物は白話小説を翻訳したもので、その翻訳の結果の和文化の度合いは異なるが、岡田（二〇〇六）の考察の結果、「和文度」が高いとされた『通俗古今奇観』『通俗平妖伝』でも「回」は見られる。

(16)〔…〕其ノ時忽チ袖ヲモッテ一回ハライ劔光ヲ攝玉フ原来此ノ鉛弾光ヲ集メ〔…〕

（通俗平妖伝・第一回）

このように通俗物においては、作品ごとに翻訳の仕方は異なるものの、行為や出来事を数える「回」が使用されている。

また、翻訳ではないものの、同じく白話小説の影響下にある読本でも「回」が使用されている。

(17) 信長の器量人にすぐれたれども、信玄の智に及ず。謙信の武勇に劣れり。しかれども富貴を得て天が下の事一回は此人に依す。（雨月物語・貧福論）

(18) 爾世を広くなるとも、此の後再び我が家に来ることなかれ。千回来るとも、爾に対面せず。（英草紙）

ここに挙げた用例のように読本における「回」にはタビという振仮名が附される例がほとんどである。章段を数える用法の「回」では音読みのクワイという振仮名が附されることも珍しくなかったのに対し、行為や出来事を数える用法では音読みのクワイという振仮名の例はほとんど無い。[4] したがって、読本における「回」は、タビの漢字表記として使用されている、とみることもできる。

特に、曲亭馬琴の作品では、多くの「回」が見られる。『椿説弓張月』では「度」が23例、「遍」が7例、「回」が21例となっており、表記としては「度」と並んで使用されていることが分かる。[5] そこで、表記としての「回」の在り方を以下でもう少し詳しく見ていきたい。

実際に用例を見ていくと、「幾回」「数回」の例に大きく偏っていることに気付く。下に挙げる【表2】は「回」が多く使用されていた作品における「回」と「度」の用例を本数詞ごとに整理したものである。

今回調査した読本で使用されていた「回」の用例66例のうち、19例が「数回」、30例が「幾回」の例であった。「度」と比較すると偏りのあることが顕著となる。このような用例の偏りが見られる原因としては、「回」が助数詞タビと結びついていたというよりは「数回」がアマタタビ、「幾回」がイクタビと熟語同士で結びついていたということが考えられる。その為、「回」が多く使用されていても、自由に本数詞と結びつくことがなく、生産性の低い状態であったといえる。この「数回」「幾回」を熟語として扱う例は、時代を溯ると古辞書でも見られる。[6] このように文学作品においては、行為や出来事を数える「回」はタビの漢字表記として用いられ、生産的な助数詞として使用されていたわけではなかった。

四・二・二　科学書

では、文学作品以外では

【表2】読本における「回」と「度」の本数詞

	作品名	一	二	三	四	五	六	七	九	十	〜百	〜千	〜万	数	幾	計
回	椿説弓張月	2													19	21
	南総里見八犬伝			3							1		1	13	11	29
	開巻驚奇侠客伝	1		5			1	1		1		1		6	1	17
		3		8			1	1		1	1	1	1	19	30	66
度	椿説弓張月	12	1	2		1					2			1	4	23
	南総里見八犬伝	41	38	15	1	1			1			2	2	10	2	113
	開巻驚奇侠客伝	7	2	1												10
		60	41	18	1	2			1		2	2	2	11	6	146

※「両」は「二」に含み、「二三度」といった例は「三」に含む

どのように使用されていたのだろうか。行為や出来事を数える表現が出てくることが期待される科学書を調査した。調査対象は岩波書店の日本思想大系『近世科学思想上・下』、朝日新聞社『復刻日本科学古典全書』（抄出のもの、原文が漢文のものは除く）および、『厚生新編』『西説内科撰』である。この中で行為や出来事を数える際にどのような助数詞が使用されていたか、調査結果をまとめると【表3】のようになる。

この結果からは、行為や出来事を数える際にどのような助数詞が使用されているのかは表記体によって大きく分かれていることがわかる。最も一般的に使用された「度」はほとんどの文献で使用され、32種中30種の文献で使用されている。「度」以外では「遍」「回」「次」が使用されているが、「回」や「次」は漢字片仮名交じり文で使用される傾向が見て取れる。「次」は現在でも中国語で行為や出来事を数える際に使用される量詞である。近世の唐話辞書のなかには「次」を載せているものもあり、「回」と同じく白話語彙として認識されていたと思われる。漢字平仮名交じりの文献と漢字片仮名交じりの文献の文体を比較してみると、概ね漢字片仮名交じり文の方が、漢語が多用される傾向があり、漢字平仮名交じり文では、比較的和語が多いことがわかる。漢字片仮名交じり文は漢文訓読の流れを汲んでいるとみられるため、「回」が漢字片仮名交じりの文献に見られるのは中世の使用の傾向を引き継いでいるといえるだろう。ここで「回」の用例を挙げておく。

(19) 然レドモ三體偶々正對シテ、日光ノ我ガ眼ニ来ルヲ遮ルコト、年ニ二回ニ及ブコトアリ。コレヲ日蝕トイフ。
（気海観瀾広義・巻四）

(20) 二日ヲ経テ再ビ一剤ヲ服スベシ。一回（イチド）ノミニテハ諸腸ヲ盡ク浄滌スルニ足ザレバナリ。
（西説内科撰要）

(21) 別に熱湯を加へ煮て前の如くすること十度、或は十二回に至る最後に能く其水気を徐々に傾け除きて硫黄を取出し、〔…〕
（厚生新編）

『厚生新編』の表記体は漢字平仮名交じりであり、例外的に見えるが、その文体を見ると漢語の多用や漢文訓読特有の言い回しが見られる。そのため「回」が使用されていたのだろう。したがって、文学作品以外では漢文訓読調を含む文献で、「回」が使用されているといえる。

どの文献も基本的にパラルビであるため、読み方を確定することはできないが、振仮名が附されている場合は文学作品と同じくタビやドと附されており、クワイと読まれた確例は見つけることができなかった。しかし、振仮名が附されていない例も多く、その場合、「回」はタビの漢字表記としてではなく、タビとは異なる助数詞「回（クワイ）」として使用されていた可能性がある。また、助数詞としての生産性を調べるため、「回」が多く使用されている『厚生新編』『気海観瀾広義』での用例の本数詞を調査してみると、結果は【表4】のようになる。この結果からは「度」と比較してみても数に偏りなく用いられていることがわかる。このことから、

【表３】 近世科学書における行為・出来事を数える助数詞の使用状況

年代	仮名	書名	度	遍	回	次	計
1564	平	親民鑑月集	24	1			25
江戸初期	平	医説	3				1
江戸初期	片	二儀略説	15				15
1688	平	御本丸様書上	2				2
1691	平	鉱山至実要録	6				6
1757	平	新撰養蠶秘書	10				10
1761	平	和漢船用集	3				3
1769	平	医事或問	4				4
1777	平	多賀墨郷君にこたふる書	7				7
1780迄	片	師説筆記	5	1		1	7
1784	平	鉱山必要記事	7	1			8
1792	片	西説内科撰	3		1	17	21
1797	平	砂糖製作記	7				7
1803	片	重訂本草綱目啓蒙	12	1		7	20
文化-文政	片	泰西七金訳説	12				12
文化-文政	平	機織彙編	48	6			54
1822	平	農具便利論	4				4
1827	片	坑場法律	3				3
1827	片	山相秘録	1	1		1	3
1828	平	製葛録	4				4
1829	平	勇魚取絵詞	1	1			2
1829	平	鯨肉調味方	3				3
1833	平	綿圃要務	6				6
1836	平	製油録	3				3
天保末期	平	大砲鋳造法	5	15			20
1811-46	平	厚生新編	71	5	37	11	124
1849	平	病学通論	1				1
1850	片	気海観瀾広義	3		27	1	31
1850	片	西洋鐵熕鋳造篇	10				10
1850	片	銃砲全書			4	8	12
1879	平	日本鉱山編	8				8
1889	片	鐵銃製造御用中心覚之概略			1		1

※仮名表記の「たび」は「度」に含み、「返」は「遍」に含む
※「年代」は『復刻科学古典全書』の著述年代、及び『国書総目録』の成立年代による。

【表４】『厚生新編』『気海観瀾広義』における本数詞

		一	二	三	四	五	六	八	十	～	百	～	千	幾	数	計
『厚生新編』	回	15	6	4	2	3	1	8		1		1		1	2	44
	度	12	20	14	10	2	1		1					2	3	65
『気海観瀾広義』	回	15	5						1	4		1				26
	度	3														3

ここでの「回」はどんな数でも用いることができる生産性の高い助数詞として使用されていたことがうかがえる。文学作品では生産性が低く、タビの漢字表記の一つであるかのように使用されていたが、科学書では生産的な助数詞として使用されていた。

五　近代の「回」

ここまで近世の状況についてみてきたが、近代に入るとその使用範囲は拡大し、日本語の中に定着していく様子がうかがえる。『和英語林集成』の初版・第三版においては「回」は次のように記されている。[7]

(22)　†K'wai, クワイ、回、n. A chapter, section. *Ikkwai.* one chapter. *Ni kwai me,* the second chapter.
（和英語林集成［初版］）

(23)　Kwai クワイ　回　n. A chapter, section, time: *ikkwai,* one chapter, once; *ni kwai me,* the second chapter; second time.
（和英語林集成［第三版］）

初版では、†の印から文章語であるということがわかり、章段を数える用法のみが記されている。しかし、第三版では、行為や出来事を数える用法が加わっていることがわかる。この増補からは、「回」における行為や出来事を数える用法が記述に値するだけの用法となっていたことが分かる。以下で、近代における「回」の様相を詳しく見ていきたい。

五・一　文章語から口頭での使用へ

近代では話された言葉がそのままに近い形で写し取られた速記の資料があるが、帝国議会の会議録には次のように行為や出来事を数える助数詞が記録されている。

(24)　規則ニ於テ一回ハ決戦投票ヲ為スベシト云フコトハアルガ、私ハ同ジコトノ決戦投票ヲ幾度モ為スト云フコトハ見出シマセヌ
（衆議院速記録号外議長副議長選挙会）

(25)　只今議長ノ述ベラル、所ニ依レバ、決選投票ハ何遍デモやるト云フコトデアル、只今ノ結果デ見レバ三遍デ済ムカ四遍デ済ムカ、殆ド底止スル所ヲ知ラヌト思フノデアリマス
（衆議院速記録号外議長副議長選挙会）

ここでは決選投票について「回」「度」「遍」が使用されている。会議録には振仮名がほとんどなく語形の確定はできないが、これらの助数詞の違いが実際の発言の反映であるとすると口頭でも助数詞「回」が使用されていたと考えられる。近世までは「回」は漢文訓読調を含む文章を中心にみられたことから、近世の「回」は文章語であったと思われるが、口頭でも使用され始めていたのだろう。

近世では行為や出来事を数える「回」に振仮名が附されている場合、タビやドといった当時の日本で一般的に使用されていた助数詞が振仮名となっていたが、近代に入ると「回」の音読みであるクワイ（カイ）が附される例も見られるようになる。

(26)　［…］此爺の実験ばなしを聞て見ると、何でも二三千回も

航海したかとおもわれる様で、〔…〕頭の皮を剥れたことさへ十五回や二十回は有つたそうでした。

（小公子・第五回）

(27) 〔…〕大に政府の警戒を引起し遂に集会條例を制定し　其の後更に数回の改正ありて條例の施行は愈よ厳重となり〔…〕

（雪中梅・第二回）

(26)(27)では「回」にクワイ（カイ）という振仮名が附されている。また地の文が文語体、会話文が口語体で書かれている『金色夜叉』では地の文ではタビと附されているが、会話文ではクワイと附されている。

(28) 佐分利は幾数回頷きて、〔…〕

（金色夜叉・中編・第一章）

(29) 「〔…〕夙て話は聞いて居るが、那の三百圓に對しては、借主の遠林が従来三回に二百七十圓の利を拂って在る。〔…〕」

（金色夜叉・中編・第六章）

このように口語体の会話文でクワイと附されていることで、ここからも口頭で「回」が使用されるようになりつつあったと推測できる。言文一致が行われて以降、行為や出来事を数える

【表5】「明治の文豪」における「回」と「度」の組み合わせ

	一	二	三	四	五	六	七	十	～	百	～	千	幾	数	何	計
度	664	218	293	18	4	2	4	2	7	2	1	2	134	2	75	1428
回	17	7	9	5	2				10				6	3	1	60

※「回」に「たび」と振り仮名が振られている例も含む。

「回」の用例が一気に増えることからもそれがうかがえる。

また、近代における「回」の本数詞との組み合わせを確認するため、明治の小説を収録した『明治の文豪』を用いて、「回」と本数詞との組み合わせを調べたのが【表5】である。これをみると何かに偏る傾向はなく、生産性が高い状態であることがわかる。このように近世までは一部でしか使用されなかった「回」が近代に入り、行為や出来事を数える助数詞として一般的に使用されるようになりつつあったことがわかる。

ここまで見てきたように一般的になりつつあった行為や出来事を数える「回」であるが、文献のジャンルによってその使用頻度には差がある。明治期の雑誌である『明六雑誌』[8]・『国民之友』[9]（創刊から二年分）と明治期の小説を集めた『明治の文豪』[10]で「回」と「度」の使用数を比較すると【表6】のようになる。文学作品である『明治の文豪』では、「回」と「度」がほぼ1：20と大きく「度」に偏っているのに対し、明治期の雑誌ではほぼ1：1で「度」と「回」が同じような頻度で使用されている。これは雑誌の文章のような硬い文体の場合に「回」が使用されやすいということを表わしており、近世においては漢文訓読体の文章を中心に使用されていたという傾向を引き継いだものと思われる。

【表6】雑誌と文学作品での使用頻度

	明治期雑誌	『明治の文豪』
度	109	1457
回	108	64

五・二　「度」の生産性の低下と「回」

ここで「度」の生産性について触れておきたい。現代において、「度」はタビと訓む場合は3までの数で用いられることがほとんどで生産性はかなり低い。またドと音読みされる場合でも10以上の数では用いにくく、タビほどではないものの生産性は低い。近年の話しことばについて、『女性のことば（職場編）』『男性のことば（職場編）』における使用を見てみると、「度」29例に対し、「回」129例と「回」の使用が優勢であるということがわかる。また「回」が様々な本数詞で使用されているのに対し、「度」は「一度」22例、「三度」2例、「何度」5例と、生産性が低い状態である。

そこで近代において、その「度」の生産性はどの程度であったかを、明治期の雑誌（前掲）を用いて調査した。すると全用例数は「度」109例：「回」108例とほぼ同じ数だけ使われているにも関わらず、10以上の本数詞につく場合のみを数えると「度」8例：「回」23例と「回」が「度」の三倍近く使用されている。また「度」の10以上の本数詞を見ても「十度」3例・「百度」2例・「数百度」1例・「億度」2例となっており、近代では、すでに生産性が低下していることがうかがえる。(1)

「回」が使用されるようになったために「度」の生産性が低下したのか、「度」の生産性が低下したために「回」が使用されるようになったのか、その前後関係は不明であるが、この「度」の生産性の低下により、「度」に変わる行為や出来事を数える助数詞が必要とされ、「回」の使用が広まったということも考えられる。

六　まとめ

以上、本稿では助数詞「回」がどのようにして受容され、日本語において一般的に使用されるようになってきたかを追ってきた。

上代より漢文で使用されていた「回」は、中世までは一般的な助数詞ではなかった（三節）。近世に入っても白話語彙として認識され、文学作品などではあまり生産性を持たない助数詞であったが、漢文訓読調を含む文章では生産的に使用されるようになっていた（四節）。その流れを受け継いで近代では使用範囲が広がり、口頭でも使用される一般的な助数詞となった（五節）。

現在、一般的に使用される助数詞がどのような変遷を経てきたのかということはまだ明らかにされていないものが多いが、「回」のように近世では漢文訓読体を中心に使用され、近代になってから一般的に用いられるようになった助数詞は、他にも多く存在するのではないかと考えている。今回はその一例として「回」を取り上げた。

注

（1）現代中国語において、「回」と「次」は動詞を修飾する量詞として使用する場合、ほとんど置き換え可能なようである。

（2）底本の前田家本では、「数回」が「すくわい」と仮名で表記されている。

(3) 中世の言語を伝える日葡辞書では、助数詞が多く載せられているが、「回」は次のように記述されている。

(ア) Icquai. イックヮイ（一回）Fitomeguri.（一回り）一巡、あるいは一回転。文章語　（邦訳日葡辞書）

『日葡辞書』では助数詞を載せる際、「〜の数え方」という説明をするため、ここでの「回」は助数詞として記述されていないことがわかる。

(4) 筆者の調査では、行為や出来事を数える「回」で振仮名に「くわい」と附されている例は、通俗物を含めても一例であった。平仮名表記された例では次のようなものがある。

(イ) ぢぞうのかほも三くわいめにはは らをたつだ。　（北国巡礼唄方便）

『北国巡礼唄方便』は曲亭馬琴の黄表紙であるが、ここで行為や出来事を数える「くわい」が使用されているのには、同音の助数詞「会（くわい）」が関係していると考えられる。「会」は遊里で女郎に会う回数を数えるもので次の例のように洒落本でよく使用される。

(ウ) 初くわいにおかるゝ心もなじむに打とけ〔…〕やりてわかいものかゑがほのよいは二会めの花から三くわいめのとこはなにはさすかの大夫も大門までおくれり　（契国策）

「会」は仮名表記された場合、「回」と区別がつかない。『北国巡礼唄方便』の清田（一九七九）の翻刻では「三くわい」に「三回」という漢字が当てられているが、この話は遊女の一生を旅にたとえたものであり、(イ) の文と同じ頁の絵も遊郭と思われる場面が描かれているため、「会」と「回」がかけられている可能性がある。近世では「回」を「会」と同じように使用している例も存在する。

(エ) 又女郎の気象をいはゞ、夜店といへる退屈なく、或は裏の三廻目のとわけた仕内なく、〔…〕自然と心のびやかにて、気象に微塵もいやみなし。　（吉原細見里のをだ巻評）

日本古典文学大系の頭注には、「三廻目」の語に対して「三廻目は三回目、この時から初めて馴染となり、それぞれ煩わしいしきたりがあった。」としているが、この「三廻」は意味としては「三会」を指すと考えられる。このような例は管見の限り（ウ）の他に一例の計二例だけであるが、「会」が「廻」「回」と表記される例は他にも存在する可能性がある。

(5) 中世の『太平記』では「度」が251例であるのに対し、「回」は3例に留まる。

(6) 古辞書において助数詞は「一」と組み合わせて項目となることが基本であるが、基本通り「一回」と書かれている場合は年月を数える用法であり、行為や出来事を数える場合には「数回」「幾回」という熟語として載せられていることがわかる。

【表】行為や出来事を数える助数詞の辞書記述一覧

辞書名	項目	振仮名（右／左）	語釈
文明本節用集	数回	スクワイ／カヘス	
易林本節用集	一回	クワイ	一年
	幾回	イクタビ	幾度
合類節用集	一回	クワイ	一年曰一――ト
書言字考節用集	数回	アマタタビ	
	幾回	イクタビ	

(7) 『和英語林集成』の再版には「回」の項目がない。

(8) 一八七四−一八七五年発行。

(9) 一八八七−一八九八年発行。

(10) 明治二〇年代から大正期の前半までの作品が収録されている。

(11) この二桁以上の数で「度」が使用されにくい傾向は近世からあった可能性がある。用例(21)では10には「度」が使用されているものの、12では「回」が使用されている。また【表4】では本数詞が二桁の用例が9例あるなかで、「度」が使用されているのは1例のみである。

使用文献

上代：日本書紀…『日本書紀』(日本古典文学大系、岩波書店)『國寶北野本日本書紀』(貴重圖書複製會)、万葉集…『萬葉集』(日本古典文学大系、岩波書店) ◆中古：うつほ物語…『うつほ物語　全』(おうふう)、菅家文草…『菅家文草　菅家後集』(日本古典文学大系、岩波書店) 枕草子…『校本枕草子』(平安文学叢刊3、古典文庫)、類聚名義抄…『類聚名義抄 觀智院本』(八木書店) ◆中世：易林本節用集『古本節用集六種研究並びに総合索引』(風間書房)、合類節用集…『合類節用集研究並びに索引』(古辞書大系、勉誠社)、正法眼蔵…『正法眼蔵　正法眼蔵随聞記』(日本古典文学大系、岩波書店)、正法眼蔵随聞記…『正法眼蔵　正法眼蔵随聞記』(日本古典文学大系、岩波書店)、太平記…『太平記』(日本古典文学大系、岩波書店)、日葡辞書…『邦訳日葡辞書』(岩波書店)、文明本節用集…『文明本節用集研究並びに索引』(風間書房)、保元物語…『保元物語平治物語』(日本古典文学大系、岩波書店) ◆近世：雨月物語…『上田秋成集』(日本古典文学大系、岩波書店)、開巻驚奇侠客伝…『開巻驚奇侠客伝』(新日本古典文学大系、岩波書店)、契国策…『洒落本大成　第七巻』(中央公論社)、好色一代女…『西鶴集上』(日本古典文学大系、岩波書店)、厚生新編…『江戸時代西洋百科事典―『厚生新編』の研究―』(雄閣山出版)、語録訳義…『語録訳義』(唐話辞書類集、古典研究会)、繁野話…『繁野話』(新日本古典文学大系、岩波書店)、小説字彙…『小説字彙』(唐話辞書類集、古典研究会)、書言字考節用集…『書言字考節用集研究並びに索引』(風間書房)、水滸伝訳義…『水滸伝訳義』(唐話辞書類集、古典研究会)、西説内科撰…「古典籍総合データベース」(http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/) 請求記号：文庫c8__c0027、俗語解…『俗語解』(唐話辞書類集、古典研究会)、椿説弓張月…『椿説弓張月』(日本古典文学大系、岩波書店)、通俗繍像新裁綺史…『通俗繍像新裁綺史』(近世白話小説翻訳集、汲古書院)、通俗赤縄奇縁…『通俗赤縄奇縁』(近世白話小説翻訳集、汲古書院)、通俗平妖伝…『通俗平妖伝』(近世白話小説翻訳集、汲古書院)、南総里見八犬伝…『南総里見八犬伝』(新潮日本古典集成別巻、新潮社)、売油郎独占花魁…『醒世恒言』(古本小説集成、上海古籍出版社)、英草紙…『英草紙』(新編日本文学全集、小学館)、北国巡礼唄方便…「古典籍総合データベース」(http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/) 請求記号：く13__01961、吉原細見里のをだ巻評…『風来山人集』(日本古典文学大系、岩波書店) ◆近代：国民之友…『(複製版)国民之友』(学習堂)、金色夜叉…『金色夜叉』(名著複刻全集、日本近代文学館)、小公子…『女学雑誌266号』(女学雑誌社)、雪中梅…『雪中梅』(特選名著複刻全集、日本近代文学館)、帝国議会会議録…『帝国議会議事速記録1』(東京大学出版会)、明治の文豪…『CD-ROM版 明治の文豪』(新潮社)、明六雑誌…『(明六雑誌語彙総索引附録) 復刻版明六雑誌第1号～第43号』(大空社)、和英語林集成…『和英語林集成』デジタルアーカイブス」(http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/index.html) ◆現代：『女性のことば・職場編』『男性のことば・職場編』(ひつじ書房)

参考文献

相原茂(一九九一)「〝次〟と〝回〟」『中国語学習Q&A100』大修館書店　六十六～六十八頁

IIDA Asako(一九九九)"Classifiers for Counting Actions and Eve-

nts: Comparison between "kai" and "do"" 『東京大学人文社会系研究科言語学研究室編論集』第十八号
飯田朝子（二〇〇四）『数え方の辞典』小学館
岡田袈裟男（二〇〇六）『江戸異言語接触―蘭語・唐話と近代日本語』笠間書院
清田啓子（一九七九）「馬琴の黄表紙（五）」『駒沢短期大学研究紀要』十五―八十六頁
佐藤武義（一九八二）「宇津保物語の語彙」佐藤喜代治編『講座日本語の語彙第三巻古代の語彙』二四五―二六七頁　明治書院
Shimojo, Mitsuaki（一九九七）"The role of the general category in the maintenance of numeral classifier systems: The case of tsu and ko in Japanese" *Linguistics* 35, 七〇五―七三三頁

（いとう・ゆき　本学大学院博士後期課程）